

編集実行委員会便り

○本号では、「国土」をキーワードに、「国民」に向けて

東日本大震災から3年にあたる本号編集の背景にある最重要キーワードは「国土」である。それゆえ、巻頭の論説は前国土交通省事務次官の佐藤直良氏にお願いした。氏のご主張は、日本の美しい景色が入れ替わり表示される同省のホームページ (<http://www.mlit.go.jp/index.html>) と重なる。特集は、岡島敬一編集実行委員会委員と、今もなお放射線汚染に苦しむ福島や今後の原子力発電の議論の参考情報とすべく「放射性物質と放射線—その基礎から除染まで—」とした。もとより二人には専門外のテーマであるので、構成の検討さらには執筆者候補の選定・依頼も容易ではない。そこで、本特集冒頭の総論記事の著者森口祐一氏には多大なご助言をいただいた。森口氏をはじめとして貴重な記事をご執筆いただいた著者の皆様に心からお礼申し上げる次第である。

さらに、本問題の国民的重要性に鑑み、著者の皆様のご了承を得て学会ホームページ上でのフリーアクセスが実現できた。これにより本特集は、わずか1,500名にも満たない学会会員の枠を越え広く「国民」に読み考えていただく可能性が開けたことは、一般社会に向かって開かれた学会活動として重要な一歩ではないかと考えている。

○福島夏の景色

筆者は本誌2013年1月号の「談話室」¹⁾にも書いたように、東京電力福島第一原子力発電所周辺には1991年以降、格別の思い出と思い出がある。その発電所と周辺を昨年7月26日、特別の許可のもと見学する機会を得た。そのとき筆者にいちばん衝撃的だったのは、当の発電所ではなく周辺の土地—農家の手が入らなくなったため雑草（本当はそれぞれの名前があるのに失礼な呼び名であり、またその雑草には何の非もなく申し訳ないが）が生い茂った元水田であった。本来7月末といえば秋の収穫を間近に青々とした稲穂が風にたなびき始めるころではなからうか？ しかし、水田が見るも無惨に雑草の地となっていたのだ。日本の美しい景観は、自然そのものでなく農家が精魂傾けて栽培している田畑による面も大きいことを、あらためて気付かされたのだ。その田畑を3年前まで自ら世話してこられた方々、またその土地で暮らしてこられた方々の悲しみを、筆者の想像が及ぶものではないとも思う。加えて、この避難にともない、諸事情により家族が離ればなれに暮らさなければならなかった場合も多い。このような何重もの悲しみを、私たちは忘れるわけにいかない。

○未来の日本人に受け渡す私たちの知恵と覚悟

筆者は長い時間スケールの中で科学技術を理解し位置づけたいと願っている²⁾。樺田尚樹氏の年表（本誌17ページ）に記されていたように、人類が放射性物質・放射線と正面から向き合うようになってからまだわずか120年に過ぎない。この間、レントゲン、CT、放射線治療、そして筋書きどおり順調である限りは廉価な発電など、人類にとって

莫大な利益をもたらした反面、原子爆弾や原子力発電事故などこれまた莫大な損失をもたらしている。これほど極端な功罪両面を持ち合わせる科学技術は他に見当たらないようにも思う。

既に十分に進化した科学技術—とりわけ各人の処理能力を圧倒する情報にも支えられて繁栄を謳歌する一方で、今回の大震災や戦争や飢餓などの悲惨さも共存する21世紀初頭の私たちを、今から100年後、200年後、さらには500年後の人たちは、どのように眺めるのだろうか、ふと思うことがある^{注1)}。というのも、おそらくその時代と局所的な環境の中にどっぷり浸っている当事者には見えていないものがたくさんあるような気がするからである^{注2)}。さだまさしさんの名曲と名著³⁾『風に立つライオン』から

この偉大な自然の中で病いと向かい合えば
神様について ヒトについて 考えるものですね♪
やはり僕たちの国は残念だけれど何か♪
大切な処で道を間違えたようですね♪

の言葉が、少なくとも大震災後のわが国にあてはまらないようにしたいと願う。誤解のないように補足すれば、それは原発の（条件付き）存続かあるいは即時撤廃かといった、筆者にいわせれば単純化された一面的な問題ではなく、真にこれからのわが国全体を幸せに導くための複雑で多面的な問題で、私たちの知恵はもちろんのこと覚悟が必要な問題なのである。かの吉田満氏をして36年前に「まだ二十五歳の若さで、自作の歌の基本テーマは、人間は死ぬものであり、生きている今の時間がどんなに大切なものかということだ、などと憎いことを言う。」⁴⁾と書かしめた、さだまさしさんの言葉はそれほどまでに重いと思う。

参考文献

- 1) 吉田英生；岩手，宮城，福島，そして東京，エネルギー・資源，34-1 (2013)，63.
- 2) 吉田英生；あたかも一身にして多生を経るが如く一人にして多身あるが如し 然し，エネルギー・資源，32-1 (2011)，2.
- 3) さだまさし；風に立つライオン，(2013)，幻冬舎.
- 4) 吉田満；戦中派の死生観，(1980)，210-211，文藝春秋（初出：日本経済新聞夕刊，あすへの話題「フォーク」，1978年3月13日）.

吉田英生
（京都大学 大学院工学研究科 航空宇宙工学専攻）
E-mail：sakura@hideoyoshida.com

注1) 相対的に考えることにより現実感を高めると、500年前の1510年ごろは大航海時代の真ただ中—コペルニクスが地動説を唱え、200年前の1814年はウィーン会議—熱学では熱素説がまだ支配的、100年前の1914年は第一次世界大戦勃発—そのすこし前には放射線の発見にも示されるように原子論がエネルギー—元論を退けていたものの量子力学は誕生以前であった。

注2) もっとも身近な例では、現代人にとって疑う余地もない男女同権につき、女性参政権がわが国で実現したのはわずか70年ほど前の1945年である。それ以前の時代における社会通念は筆者にはほとんど理解不能である。